

(串木野市上名字門前外)

位置と環境

本遺跡は、薩摩半島北西端の串木野市上名に位置し、薩摩半島のほぼ中央を貫く山地から西へ延びる標高約50mの台地縁辺部から、現代まで水田として利用されていた低湿地部分までの約50,000㎡で構成されている。

遺跡の東には徐福伝説で知られる冠岳、北に火立ヶ岡を望み、眼下には五反田川が東シナ海へ流れ込んでいる。また、本遺跡の西約600mには串木野城跡、東約800mには本遺跡とともに串木野城跡の出城であったといわれる坂下城跡が存在する。

調査の経緯

調査は、南九州西回り自動車道川内道路建設に伴い、建設省九州整備局鹿児島県国道工事事務所（現国土交通省九州整備局鹿児島県国道事務所）の依頼を受けた鹿児島県教育委員会が、平成8（1996）年8月に分布調査を実施し、事業区域内に周知の遺跡である梶城跡が存在することがわかった。

その後、県教育委員会は、鹿児島県国道事務所との協議に基づき、平成11（1999）年11月に確認調査を実施した。その結果、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。

確認調査の結果に基づき、平成12年11月～平成13年1月、平成13年度、平成14年度、平成15年度に本調査を実施した。

遺構と遺物

本遺跡は、大きく台地部・微高地・低湿地部に分けられる。

平成12年度の調査では、縄文時代早期と考えられる落とし穴が3基検出され、3基ともに底面に杭を打ち込んだと考えられる小穴が確認できた。また、中世の墓壇、底付掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、竈が各1基ずつ検出された。

平成13年度の調査では、台地上で中世のものと考えられる底付掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、竈が前年度に引き続き検出された。また、低地部では近世郷土年寄屋敷跡やこれに付帯する施設、その下層



第1図 梶城跡の位置

からは杭列が検出された。遺物には、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・青磁・白磁・染付・瓦質土器や、滑石製石鍋・カムイヤキ・東播系須恵器・備前焼等の移入品も出土した。また、低湿地部では古代の土師器や須恵器ともに碗や曲物等の木製品が出土した。

平成14年度の調査では、中世と考えられる竈跡が25基、墓壇13基や溝状遺構が検出された。また近世の遺構として墓壇145基のほか、前年度に引き続き郷土年寄屋敷跡に付帯する様々な施設が検出された。遺物には、古代の土師器や須恵器を中心に、墨書・刻書・刻印土器、提碁、41枚が一括出土した北宋銭、木槌や木錘等の木製品も発見された。

平成15年度の調査では、台地上で旧石器該当層から黒曜石の細片が数点出土した。前年度の調査でも出土しているが、明確な製品といえるのは平成13年度に出土したチャート製の三稜尖頭器1点のみである。同じ台地上で、五輪塔などの石塔約200個が廃棄された硬化面を伴う溝状遺構が検出された。五輪塔が建立されていたと考えられる地点からは敷石と見られる集積状の円礫が検出された。また、小円礫が中心に集積された地点では、小礫に文字が確認できたことから、この遺構が一字一石経塚であることが判明した。

更に、鑿の痕跡が確認できる凝灰岩の露頭が検出された。楔の痕跡が明確な礫が多量に見つかり、石切場であることがわかった。また石切場に付帯する施設だと考えられる鍛冶炉や凝灰岩を削り抜いた柱穴を持つ掘立柱建物跡が検出された。

特徴

本遺跡では、近世初頭に建立され、明治の廃仏毀釈で廃寺となった良福寺（15世紀に建立されたと見られる蓬福寺が元である）住職の墓石が10基確認された。このうち9基については住職名が確認でき、2基は円筒形でそのほかは四角柱形である。遺跡内にある井戸跡に建立された石碑には岩水山良福寺水天善神宝暦十一年巳の銘があることや、大堂庵や門前などの地名もあることから当遺跡が良福寺の寺域内であったことがわかる。

更に、中世墓が20基、近世墓が167基検出されている。中世墓から出土した人骨は残存状況がよくないが、古銭や土師器が副葬され、釘の出土位置から棺桶の形状が推定できるものも検出された。近世墓からは人骨とともに六道銭・数珠玉・簪・煙管等が出土した。

また、徳之島産のカムィヤキが約40点出土している点も注目される。滑石製石鍋や輸入陶磁器、東播系須恵器や備前焼等の移入品も多数出土していることから、中世の時期における他地域との盛んな交流の様子が窺える。

中世から近世まで使用したと考えられる凝灰岩の石切場は、南九州初の事例である。切り出された石材は、五輪塔等の石塔や墓石、石垣等の建築部材として利用されたと考えられ、当遺跡で見られる石垣や石造物のほとんどがここで切り出されたものと考えられる。使用された年代は、石塔の形式と墓石の年代から15世紀後半から近世末までとみられる。

石切場は台地の北西端から発見されたが、東側の一部と西側に二分され、挟まれるように掘立柱建物跡や鍛冶炉跡が検出された。検出状況からこれらの遺構は石切場に付帯する施設と考えられる。

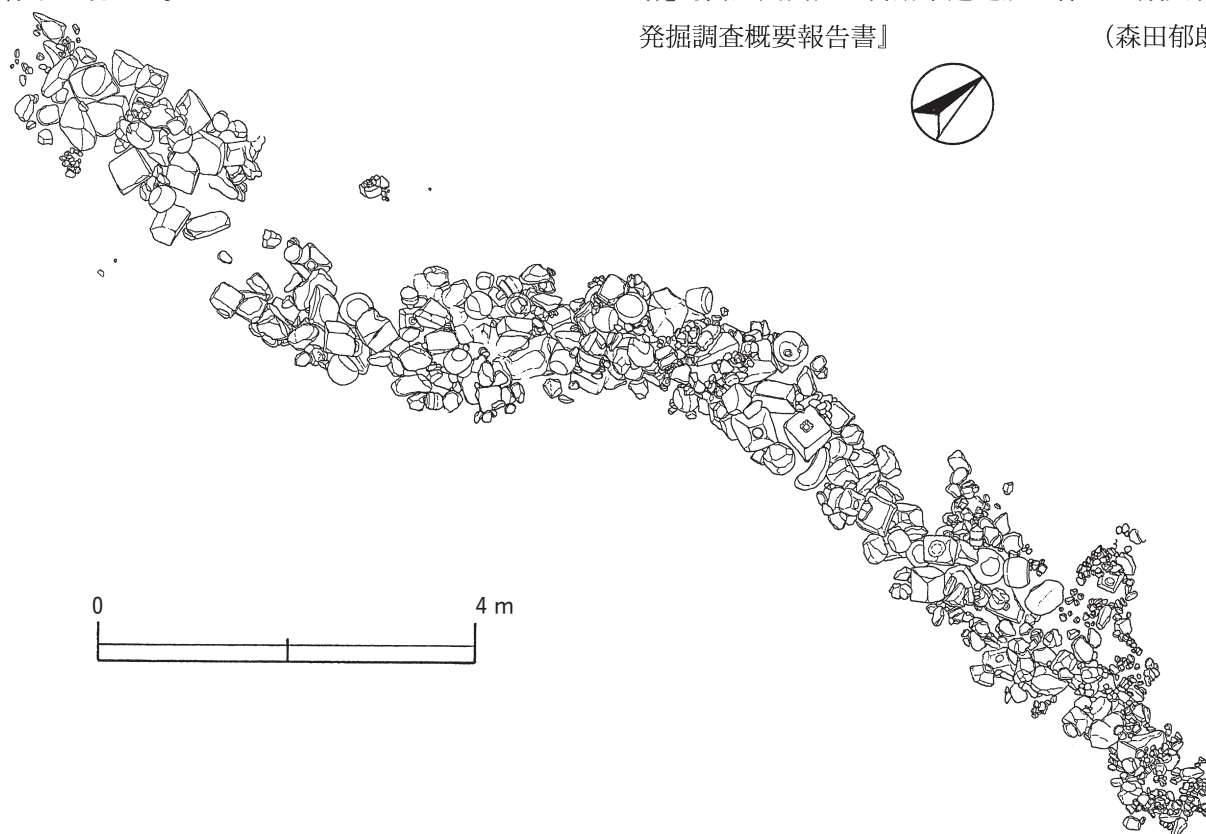
以上のことから、本遺跡は旧石器時代から近世までの複合遺跡であり、中世の山城、中世から近世の寺院、中世から近世まで使用された石切場という大きな要素が窺える貴重な遺跡である。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

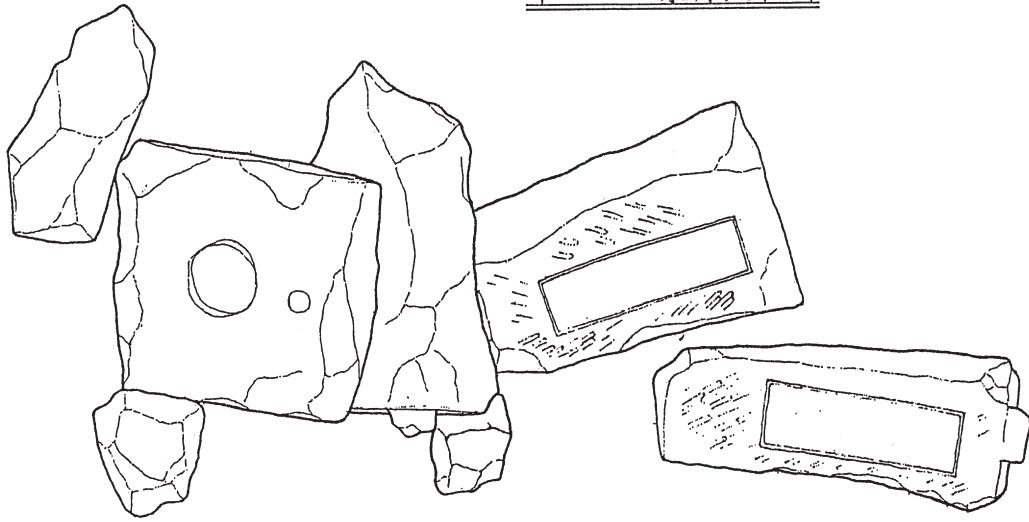
参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2000～2003「杵城跡」『南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』（森田郁朗）



第2図 五輪塔廃業溝跡検出状況

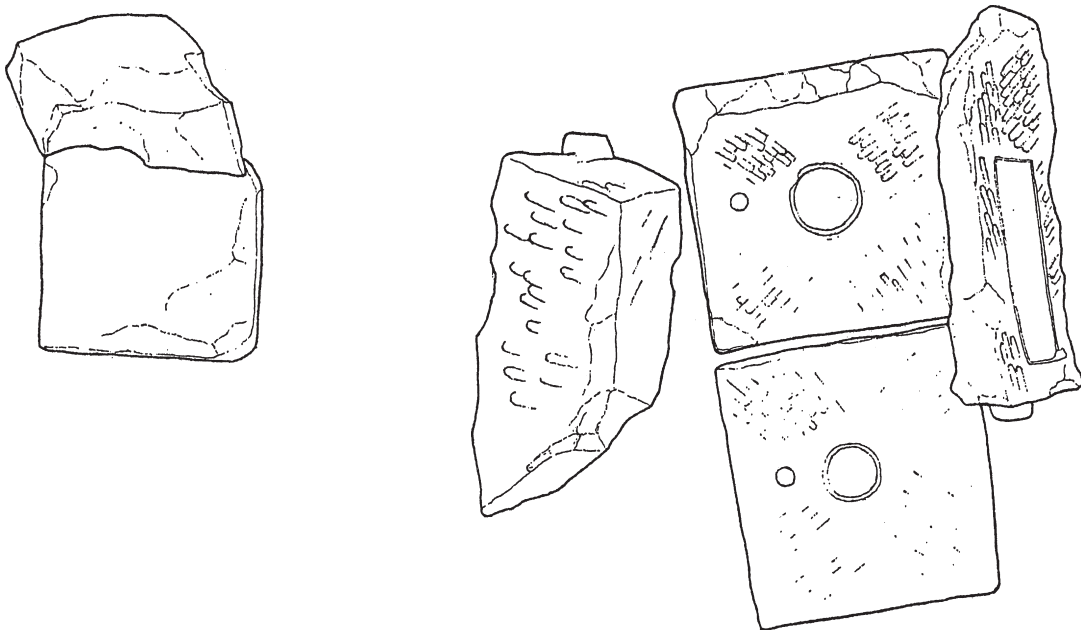
十二世 東月大和尚



四世 栴方大和尚

九世 東岸大和尚

八世 月航大和尚



第3図 良福寺和尚墓検出状況 (S=1/12)



写真1 遺跡遠景



写真2 石切場跡に築かれた石垣



写真3 ツルハシの痕跡

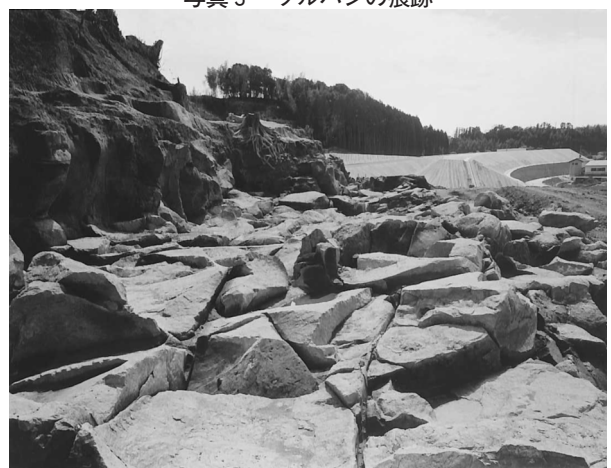


写真4 石切場跡の様子